

山田先生を送る

山田巖先生にはまことに残念なことなのであるが、本学の定めるところにより、本年三月末日で退任されることになった。そこはかたない淋しさを感じるのである。

先生は昭和四十二年わが国文学科に大学院博士課程が設置されるにともない招聘され、赴任されたのである。以来二十一年間にわたりお勤めいただいた。この二十一年間は本学に取ってはたいへん重要な時期であったわけで、いわば今日の本学の基礎固めの時期といえるのである。あのいまわしい学園紛争、赴任早々の山田先生も紛争解決に奔走されたのである。しかしこの学園紛争は教場が封鎖され学内は混乱したが、紛争の原因究明することにより学内改善の方向へと進んで行った。これが今日の本学の基礎作りの元となったといっても過言ではないのである。山田先生もこの間あるときは国文学科主任を務めるかたわら、短期大学部長や短大國文科主任といった要職を兼任されるなど、おおいに尽力された。またこの二十一年の間に先生のご指導をうけた国語学専攻の学生も多勢輩出し現在各地で活躍している。これも先生の学問とお人柄によるものなのである。

先生が国語学の研究へと進まれたのは、東京大学において橋本進吉博士の講義に魅せられたからであるという。以来今日まで五十余年、特に中世語を中心に研究を続けて来られた。中でも有名な論文は「院政時代の語法」という論文で、岐阜大学におられたときである。先生はその後国立国語研究所に移られ、本学に來られる

まで勤めておられたわけである。

さて、先生はまたたいへんなお酒の愛飲家であられる。古稀を迎えられたころから少し前屈みになられはしたが、七十半ばを過ぎた今日でも新宿へお通いになるのが何よりの楽しみにされておられる。これはただお酒が好きというだけでなく、健全な体力もなければならぬわけで、われわれとても真似ることの出来ないことである。山田先生どうかこれからもよくよくご自愛下さい。そして学問のご研究にそしていよいよ楽しい、おいしいお酒を召し上って下さい。

昭和六十三年正月

村 上 光 徳